羊
小屋
HITSUJIGOYA
Fallen Blade
フォールン・ブレイド
ADULT
R18
18才以上のみ対象

「はあああっ!!」

世界の再生が行われてしばらくした後…

女性型のブレイドが消息を絶つという事件を聞き…

ヒカリちゃんと二人で調査に来たのですが…

謎の軟体生物に攻撃を受けヒカリちゃんとはぐれてしまいました

はぁ

はぁ

ズ ズ ズ

く…

しまっ

そして私は…

ブ ハ ッ ッ ッ

!!

レックス…

『はぁ…はぁ…』
囚われた私は何とか脱出を図ろうとしたけど
触手の拘束はとても強く…脱出できそうもありませんでした
はぁ
はぁ
それに…この触手……っ!!
「やっ…そこ、破いちゃ…!!」
さっきからエッチなことばかりしてくる…っ!
プチ
プチ
この生物の体内だと力が使えない…
体もなんだかおかしい…次第に熱く…なって来てる…
私を拘束してるこの触手…まさかブレイドの力を封じ込める何かを持っているというの…?
ビチャ
ビチャ
ビクッ
ビクッ
「だめっ敏感になってるのにっ!!」
「こんな…っいやぁ…っ!!」

そしてそれは
突如に始まりました

「え……？」

「な、何をするつもり!!」

「だめ！来ないで！」

「まさか!!」

なにっ!!

先端に宝石を
付けた触手は…

私の大事な所を
押し開き…

「いやっ!!」

…あっさりと
私の純潔を奪って
いったのです

レックスに
捧げたかった純潔

そんな私の願いを
踏みにじった触手は――

――その奥にある
私たち女性にとって
最も大事な場所

「子宮」の入り口に
到達し――

ゆるさない…

こんな…
触手なんかに…

絶対に…

――さらなる略奪を――
「ゆるさ…な…」
『『い…っ!?』』
――始めたんです――
「あ……」
「え……？」
「あ…あああぁぁぁ……」
体内のエーテルが…
強制的に…
吸い取られ…て……っ!!
だめ、何かが…来ちゃう!

その快楽は
私を生まれて初めての
絶頂を迎えさせるには
十分すぎる衝撃でした
女性型ブレイドの
子宮はコアと密接な
関係にあり
大量のエーテルが
蓄えられています
その大量のエーテルを
ブレイドから分解し
一気に奪って来る謎の力に
私の胸元のコアには
亀裂が走り
エーテルで作られた
私のスーツも
子宮付近から
弾き飛ぶように四散
していったのです

「だ…め、ドンドン吸われて…い…くぅぅッ!!」
吸われれば吸われるほど絶頂させられ
私は抵抗する力を奪われていきました
吸われるたびに来るこの快楽…
とても…耐えきれ…な…い!!
さらに…
「だめ、そこはっ!!」
入らな…っ!!
「…いやぁぁぁっ!!」
触手は固く閉ざされた子宮口を難なく突破し…
その奥に眠るエーテルを奪うため吸引を強めてきたのです

無防備な子宮内部
触手が向かった先は
「卵巣」でした
卵子はエーテルの塊
それを
エーテル
操作によって
『強制的に排卵』
卵巣から
分離させてきたのです
その全てが――!!
「あ…」
「嘘…こんなの…」
子宮から無理やり
卵子を分離させられてる
私は小刻みに震えてました
「排…卵…させら…
れ…てる…!?」
「そん…な…」
子宮の数倍以上の
エーテルの塊
それを奪われたら…
私は…もう…
「まさか…」
「やめて…」
「それ…だけは…」
敗北してしまう…
ブレイドとしての力…
女としての尊厳…

『――奪い尽くされる――!!』
ビクッ
ビクッ!!♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ

ブレイドとしての力の大半を奪われても尚触手たちは私の体からエーテルを貪っていました

アソコは子宮口が露出するほど捲れてしまい…

砕けたコアは5分の1ほどが触手に吸収されて…

「は――…は――……」

胸からはエーテルの混じった母乳がだらしなく吹き出すように開発され

断続的に来る絶頂と吸収に耐えていました

「レ…ックス…」

――きっと助けに来てくれる――

必死に私は自分にそう言い聞かせ諦めませんでした

突如、アソコを蹂躙していた触手が引き抜かれたのです

「ひっぐぅぅぅ…っ!!!」

おぞましいほどの快楽の衝撃

コアがさらに砕けた私の目の前に――

「はぁ…っはぁ…っ」

「真の凌辱者」が姿を現したのです――

この魔物の「目的」
捕らえたブレイドの力を奪うだけではなかったのです…
獲物の生存本能を掻き立て意図的に排卵させるため
腟をめちゃくちゃに広がるまで捲り上げたのもこれから何度もここを通過させるため…
――そして――
この魔物の精液…
私だって知ってる
「まさか…」
人の精子は卵子よりはるかに小さい事くらい
「化け物の…精子…?」
でもこの液体の中で泳いでいる精子は…
肉眼でも見えるほどの異常な大きさ…
「嘘…そんな…」
――つまり今までの行為は種を植え付けるための前座でしかなかったのだ
そして今準備は整ったのだ
迫ってくる触手からおぞましい数の精子が見える…
この時ようやく私はこの触手の真の目的に気づいたのです…
「いや…来ないで…」
「いやぁぁ…」
――私を「苗床」にするのだということに――

無理やり
捻じ込まれてくる
いびつな生殖器
「「あが…っ!!」」
あっという間に
子宮口を貫き…
叩きつけてくる触手に
成す術もなく
犯される…
それほどまでに私の
力は奪われて
いたのです
私の腕くらいある
その生殖器は
アソコが裂けるんじゃ
ないかと思えるくらい
強引に入ってきました
「だめ…っ
卵子…卵子はダメぇっ!!」
「エーテル…っ
残ってないからぁっ!!」
だめぇっ!!
今射精されたら――
精液を浄化できない…
避妊が…出来ない…
確実に「「孕んでしまう」」

ブボボボ…
ブボボボ…
『〝い〟や〝ぁぁっ!!』
ボボ…
ボボ…
ボボ…
「産みたくない…っ!!」
産みたくないのに…
アソコが…私のアソコが
もう…受け入れる
準備しちゃってる
「こんな化け物の
赤ちゃん…っ!!」
「〝あ〟ああぁっ…!!」
赤ちゃんの部屋…
無理やり…
入ってきてる…
ボボ…
ボボ…
ボボ

『助けて…っ!!』
『レックスーーっ!!』
ビュルルルル
ドプッ
ビュッ
ビュッ
ビュ

エーテルの大半を失った私の子宮ではその絶望的なまでに荒れ狂った精液の奔流を拒むことはできず…
あっという間に卵管で漂っている私の卵子たちを取り囲んで来たのです
卵膜は成す術もなく突き破られ
大量の精子が卵核に喰い付き――
「～～～っ!!」
卵子の中にある大量のエーテルが奪われ味わったことのない虚脱感と絶頂が何度も私を襲った直後――
私はブレイドとして女として完全な敗北を…理解したのでした――

あれから数時間が経過し…
受精卵は私の子宮のエーテルを餌に次々と成長し
何度も何度も…
孕まされては産まされ…
——彼らは——
産まれてきました
何度も
何度も
私の子宮…
もう…
壊れ…ちゃ…う……

その後も――
怪物を産まされ
続け――
百匹近い
数の怪物を
出産しても尚
私は…犯され
続けていました…
コアクリスタルは損傷しても
「扉」からエーテルを
取り出す力は残っており…
簡単に消滅できない
「天の聖杯」である私は…
彼らにとって都合のいい
「苗床」だったのです
「レッ…クス…」
「ビ…カリちゃん…」
蠢く怪物を胎で
感じながら…
私は大切な人達の名前を
ただ呟いていました…

『ライトニングバスター!』
ホムラとはぐれて
かなりの時間が経過し…
私は何とか逃げながら
軟体生物の攻撃を
凌いではいたものの
ボト
はぁ
はぁ
来た道も分からなく
なってしまい
焦りを覚えていた
ブレイドの私だけじゃ
厳しい…
やっぱりレックスを
連れてくるべきだったわ
早くホムラを
見つけないと…!
そんな私の目の前に
現れたのが…
はぐれたホムラだった…
『無事だったのねホムラ!?』
…
何か様子がおかしい…
でも…無事だったことに、
私は安堵した
『ちょ、ちょっとなんて
格好してるのよ!!』
「とりあえず
見張っててあげるから
服を修復しなさい」
「ほ…しい…」
「ヒ…カリ…ちゃん…」
「ブツブツ
言ってないで
早くしてよね」
まだ?
「ちょう…だい…」

え…？
なに…？
コアが…
「あ…かはっ…」
貫かれてる…？
捕まえたぁ…♪
「ヒカリ…なに…を…」
「私ね…欲しいの…ヒカリちゃんの…エーテルが…」
「頂戴…？」
「ヒカリちゃんの…力…」
動け…ない
「やめ…やめなさい…」
全部――
コアのエーテルが暴走させられてる――っ!!

ボッ
ボボボ!!
「コアの…一部を壊したわ…」
「これでもう…力は使えない…」
「ホム…ラ…」
「えっ!?」
ホムラ…じゃない…!?
改めて見るとはっきりとわかる…
「ほら…この子たちも早く味わいたいって言ってるわ」
「ヒカリちゃんの膣内を…」
ぐぱ
ニュル
足元から広がる気味の悪い触手たち…
操られているわけではない
でも…私の知ってるホムラでもはない…
こいつは「ホムラ」に似た別の何かだと…
じゅく
じゅる

「ホムラに…何をしたの!?」
「ホム…ラ…?」
「ああ、オリジナルのことね…」
「な…っ!?」
ぱぁっ
「私はオリジナルから奪ったエーテルで生まれた」
突然巨大な肉の塊が現れ口を開く…
そこには…
「力を奪う時コアを壊しすぎたから…」
「扉が不完全になって採取できるエーテルが極端に弱くなったの…」
全身を余すことなく犯し尽くされ白濁にまみれたホムラの姿だった…
「オリジナルの「卵子」と私の「種」を受精させて」
「小さな私の分身を沢山孕ませたの」
ズル
ビュ
「ああ…ホムラ…」
「こんなことって…」
「繰り返し繰り返し…奪ったエーテルから情報を得て「私」という自我を得たの」
「湧き出るエーテルは私にとって最高の食事なのだけど…」
「失敗…やりすぎたわ…」

「丁度…産まれるわ…新しい私の…一部が…」

『ふふふっ…♪ また新しい…一部が…産まれたわ…』

「劣化…した子宮…では効率が…落ちちゃって…困って…たの」

ホムラのアソコから醜い怪物が産まれる

『ホムラっ！返事をして！』

「子宮のエーテルが少ないと育つのにも時間がかかっちゃう」

「ホムラっ!!」

「でも、ヒカリ…ちゃんが…いる…」

「同じ…『天の聖杯』…ヒカリちゃん…の力も手に…入れれば私は…完全に…なれる」

「ああ…入ってくる…これで…また…近づく…」

「ん…だから…今度は…」

生ませた化け物と融合している…!?

「は…ふふっ…ふふふふっ♪」

「『失敗』…んっ…しない」

怪物を取り込んだ途端…拙かったしゃべり方が流暢になる…

『進化』しているのだ…

―恐ろしい速度で―

『今の私には知識がある…』
「ヒカリちゃんは
エーテルを使えない…」
「力が使えなければ
避妊も出来ないわ」
「受精させ放題の
可愛い子袋」
ゴチュル
メキ
メキ
ゴチュル

『ふふっ…立派な
おちんちんでしょ♪』
『今からこのおちんちんが
ヒカリちゃんの子宮を
犯すのよ♪』
「…っ!?」
はぁ
はぁ
ドン
ドン
ペロ
「安心して…
ヒカリちゃんなら
立派な「ママ」になれるわ」
ホムラに似た「何か」
彼女の顎が頭を擡げ
私の初めてを…
突き破ろうと
していた…
ズチュ…
ガク
ガク
なによ…これ…
犯される…?
こんなに
太いので…!?

まっ
ぶちっ
ぐいちゅ…
私のアソコに無理やり捻じ込まれてくる触手
サイズの違いは明らかでアソコの肉が悲鳴を上げているのが分かる
「痛…っ!!」
「入らな…っい…からぁっ!!」
「女のここはそう簡単に壊れないわ」
「あっぐ…!!無理…!!無理ぃぃっ!!」
「こうやって穴を広げて…っ」
『『ほらっ!!』』
「ぃ"ぃ"あ"ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
肉の裂ける音と同時に上がる悲鳴
綺麗に閉じられた私の処女宮は――
たった一度の侵入で破壊されてしまった…

『あはっ♪ すごい、すごくいいわ ヒカリちゃんの中っ!!』

『やめ…っ』

『あ゛あ゛あっ!!』

『抜いて! 抜きなさいよ…っ あぐっ ひっぐぅぅぅっ!!』

「何を言ってるの?」

「これからじゃない 私のとの子作りはね!!」

「そんなの…っ」

「あぐ…っ 嫌に…決まって…る…でしょ!!」

『ああっ!!』

苦しい!! お腹の中を鈍器で何かで殴られてるみた…いっ!!

子宮ごと突き破りそうなくらい激しい輸送に私の下腹の肉は盛り上がってしまっていた

『そろそろ射精すわよ たっぷり受け止めなさい!!』

『な…っ!?』

『射精』

死刑宣告に聞こえたその言葉に私はあらんばかりの力で抵抗する

でも、力の落ちた私では拘束を解くことは叶わず…

「一番奥で出してあげる!」

『子宮の中で…』

『…ね!!』

「いや! イヤァァっ そこは…レックスの…っ!!」

ドピュッ
ドピュッ
ビュッ
ビュッ
ビュルルル
ビュルルル
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ
ビュルルル
ビュルルル
ビュッ
ビュッ
ビュッ

流れ込んでくる
精液の濁流

目を見開き、悲鳴を
上げながら私は
痙攣していた

「あははっ!!
沢山飲みなさい!!」

「ほらっ
ほらぁっ!!」

「いやああっ…子宮に…
子宮の中に
入ってきてる…!!」

「こんな…
…こんなぁ…っ!!」

子宮口を突破した
触手の精液は
あっという間に
子宮を満たしてきた

「うっ…あ…」

「…あら、すぐに
受精するはずなのに
足りなかったかしら…」

「は…は…」

怪物は静かに私を
見て納得した…

「驚いたわ…」

「まだエーテルを
使えたなんて…」

「排卵を抑制すれば
受精しない…」

「少し見くびっていたわ…」

『私のおちんちんで受精してれば良かったのに…』

「気が変わったわ」

「今からヒカリちゃんの子宮内で起こる楽しいショーを体験させてあげる!!」

地面のいたる所から現れてくる触手が私の大事な場所目掛けて殺到してくる

「やめ…っ!!」

1本…2本と…処女を失って間もないアソコに無理やり入り込んでくる

「ひぐぅ…っ!

〝あ…〟〝あ〟あぁぁ…

無…駄よ…っ」

「排卵…だけは…するもんですか!!」

「〝あ〟〝あ〟〝あ〟あ〟あぁぁぁぁあ…っ!!」

容赦なく入り込んでくる触手は再び最奥である子宮の中まで入り込んでくる

私は排卵を防ぐために卵巣にエーテルを集中させていた

最後まで諦めない…それがレックス達と旅を経て得た私の希望――

『!?』

突如頭の中に突如ビジョンが流れてくる

体の中、子宮の奥…そして私の最後の砦…

「卵巣」のビジョン

なにこれ…頭の中に直接…これっって…

しま…っ!!エーテルの制御が…っ

うあああああっ!!

抑え…きれ…ないっ

ただでさえギリギリの所で耐えていたのに突然脳内に映し出されたビジョンと

だめ!耐えてっ!!

今排卵したら私は……もう…っ!!

子宮壁が突き破られると錯覚するほどの衝撃が私を襲う

そして排卵を抑えていた卵巣は制御を失い…

「ぶちゅっ」と…惨めな敗北の音が子宮内で響く…

「あはっ♪」

「排卵したわ♪」

同時に私は惨めに絶頂した…

「さあ!!」

『『孕む瞬間をその体で味わいなさいっ!!』』

それはコアを通して流れ込んでくる
今現在、私の子宮内で起きている出来事…

「…な、何よ…あれ!?」

「あれが全部精子…なの!?」

我先にと「私」という卵子に群がってくるおぞましい怪物の姿をした精子たち…

必死に逃げようとするが私はほとんど動くことが出来ず、すぐに追いつかれ

あっという間に囲まれてしまう

「く…来るな!!」

「この…っ!!」

化け物の姿をした精子は私を護る「最後」の砦である卵膜に牙を立ててきた

次々と膜に牙を立ててくる異形の精子達

「ああ…そんな…」

力のない膜は一瞬にして食い破られ、次々と化け物が私目掛けて殺到してくる

「だめっ入ってこないで!」

「あっちへ行きなさいよ!」

「くっ、放しなさい!!」

「いや、いやぁぁぁっ!!」

化け物たちの波は私に到達した

そこには受精という神秘は一切存在しない異様な光景

一方的な「蹂躙」と「輪姦」による「強制受胎」

私の体を飲み込みながら胎内を犯し尽くしてくる

急速に奪われていく力…

「あ"あ"あ"あ"あぁぁぁぁぁぁぁ――っ!!

今まで味わった事のない快楽が絶え間なく襲ってくる

「あぁぁっ!!」

「いやぁっ」

「私の中に入って来ないでっ!!」

「やっ!!耐えられない…っ!!イク…っイクっ!!イッグゥゥゥゥゥっ!!」

そして――

絶頂で目の前が真っ白に染まっていく…

意識が戻るとそこには…

「どうだった ヒカリちゃん？」

「卵子になって精子達に ぐちゃぐちゃに 犯された気分は？」

「ホムラの姿をした 化け物が満足そうに 微笑んでいた」

「う……あぁぁ……」

受精のショックと 急速にエーテルを 失った私は 指一本動かせないほど 疲弊していた…

「ちょっと 犯しすぎたかしら」

「でも、目的は果たしたわ」

だらしなく広がった 秘所からは 吐き出された精液が 溢れかえっており

さっきのまでの凌辱が 嘘ではなかったことを 物語っている

「ああ…楽しみだわ ヒカリちゃんから 産まれる力…」

ホム…ラ…

「これで完全な 力が手に入る…」

「ああ…早く出てこないかしら…」

ごめん…なさい…

「孕んだ」

子宮の中で 蠢き始める 無慈悲な胎動…

体中のエーテルが その胎動の主に 奪われていくのを 感じる…

その事実が 私の心を更なる絶望に 突き堕としていった…

ぼー…

う…

ぼー…

う…

ぼっこ

ぼっこ

ぼっこ

あれから何度も
触手で犯され…
絶頂させられ…
孕まされて…
そして…
6匹目を産んだ頃…
「う…レッ…クス…」
最愛の人の名前を
うわごとのように
呟く私の体は怪物の
精液まみれとなっていた
アソコは囚われていた
ホムラと同じくらい
ひどい有様となり
膣は醜く開き
短時間での複数回
出産も災いして
子宮口も押し出され
羊水と精液が混じった
液体を涎のように
垂らしていた
ホムラに似た怪物は
私から産まれた
5匹を取り込むと
さらにその姿を変えて
私とホムラを
残してどこかに
行ってしまった…
「最後の仕上げを!」
そう言い残して…
その言葉の意味が分からないまま
私の瞳は、壁から出て来た
新たな触手の姿を
ただ見つめる事しかできなかった

ヒカリとホムラが
消息を絶ってしばらく
経過したころ

ゴォォォ

謎の生物は
ホムラとヒカリ
両方の力を奪い

プネウマとなり
世界中でブレイドを
狩り続けた

彼女の力はあまりにも巨大で
立ち向かったブレイドたちは
次々とその刃を折られ――

――彼女に捕獲されていった

ニアもその一人…
触手で子宮の中を激しくかき回され少しずつエーテルを奪われていた

「やめっ！」

「〝あ〟あああぁっ!!」

「そこっ…!!だめぇえぇっ!!」

「嘘…っ!!中で膨らんでやだ、出すな！」

下腹の服が破けるほどの勢いで注がれる精液が私の子宮に流し込まれる

何度も犯され開発された体では流れ込んで来る精液を拒むことはできず

濁流が子宮壁を叩くと私はあっさりと絶頂を迎えてしまった

「〝あ〟――ッ!!」

「や…出て…る…」

また、イカされた…エーテル…が…なくなっちゃう……

子宮を汚した凌辱者達は次の標的を求め卵管に潜り込んで来る

また…赤ちゃん…出来ちゃう…

やだ…やだぁ…

エーテルの詰まった卵子を受精させ母体を孕ませるために…

サイカや、カグツチ
歴戦のブレイドでも
彼女には勝てなかった

どんなに優秀な
ブレイドでも
彼女には決して敵わない

一人、また一人と…
敗れていく
ブレイドたち

その芳醇なエーテルの
宿った体と
まだ汚れを知らない
子袋を狙われ

彼女の操る触手に
蹂躙されていった…

彼女たちのエーテルは有限

「マスターブレイド」ではない
「ブレイド」にとって
限りある命を
奪われていくのと同じ

エーテルが尽き
コアに亀裂が走る―

―コアが砕けた瞬間
彼女たちはこの
快楽地獄から
解放される…

はずだった…

コアに戻ったブレイドは
「再同調」を促されると
ブレイドに戻る

「こ…ここ…は…？」

「おはよう
大事な苗床さん」

「さあ、始めましょう、
今度はどんな声で
泣いてくれるかしら」

「ひっ何よこれ！
やだ来ないでっ！」

ブレイドたちは
目覚めるとすぐに触手たちの
海に放り込まれる

当然、「凌辱の記憶を失った」まま…

新品のコアとエーテル
そして新鮮な反応
汚れを知る前に
戻った子宮に化け物は
歓喜した

拘束したブレイドから
エーテル貪り
子宮に子種をばら撒く

それはコアクリスタルが
完全に砕けるまで
終わらない『命の循環』

唯一の救いそれは

一度コアに戻ったブレイドは
マスターブレイドと違い
過去を失う…それだけだった…

――触手に囲まれた部屋…
孕まされたブレイドたちは
ここで出産を強要される
ブレイドたちの
淫靡な声が響き渡る
出産を必死に
耐えるカグツチの隣には
今まさに触手の幼体を
出産したばかりのホムラの
姿があった
その腹は虚ろで、胎内には
まだ何匹も幼体が
蠢いているのが見て取れる
ニアは出産を迎え
激しい絶頂の
真っ只中だった
そしてヒカリのアソコには
腕よりも太い触手が
次の子を孕ませるために
子宮内部で暴れまわっている
全員お腹に
奴隷の紋章のようなものが
刻まれている
ホムラのお腹から
触手の怪物が生れ落ちた瞬間
お腹の紋章の数字が
変化するのが見えた
快楽で望まぬ絶頂を
繰り返され
その際に漏れ出した
エーテルは光となって
ゆっくりと
天井の光る球体に
吸収されているのがわかる
その数【560】
それは「出産数」
ヒカリには
【372】の数字が
二人が孕まされ
生み落とした
回数だった――

「さっき、苗床部屋の
ブレイドの 子が何人か
コアに戻ったわ」

「やっぱり
普通のブレイドじゃだめね
ちょっと壊しただけで
すぐコアになっちゃう」

「再同調すれば
全てを忘れ、状況を
理解できず、また
苗床になってくれるけど…」

「再同調できるまで
コアに力が戻らないと
いけないのは
めんどくさいわ…」

「その点、マスターブレイドは
どんなに激しく犯しても
コアにならない…」

「でも、問題もあったわ」

「もう3日…」

「さすがに気がついてるでしょ?」

「3日も子種を
注いでるのに
まだ受精して
ないことに…」

「貴方たちの子宮もう排卵をしてないわ」
「卵巣が機能を停止してる」
「つまり、もう二度と受精することはない」
「ふふふっ良かったわね産まなくていいのよ…」
彼女が言っていることがあまりにもショックな内容で最初は理解できなかった…
でも度重なる激しい性行為と数千を超える出産は――
いかに私たちが「天の聖杯」であっても生殖機能を破壊されるには十分すぎる回数だったのです
犯され続け、数えきれない量の出産をした性器は恐ろしいほど醜く広がり
もはや子袋が膣外に出ないように支えることすらできないほど壊されていました
触手は卵巣にあった未成熟な卵子も次々と取りだしては受精をさせ
その暴食はいつの間にか卵巣のエーテルをも喰い尽くしてしまっていたのです…
それでも…

希望を…未来を捨てなかった

まだ受精できる…愛する人との子供を…

そんな一縷の望みに賭けて必死に耐え続けていた二人にとって

『もう…産め……ない…？』

ぱっ

うそ

『よかったわねぇ。これで醜い触手を産まなくて済むんだもの』

「ああ…この場合、本当に幸せだったのかしらね…？」

そん…な…

「だって愛する人の子供がもう作れなくなったんだもの!!」

「レックスの赤ちゃんは私が代わりに産んであげるわ!!」

レックス…

レックス

う…

「貴方たちの目の前でねぇ！」

「あはっはっは!!」

「あはっ！」

その宣告は…異形を孕み続ける地獄からの解放

それと同時にもう、愛する人の子供を孕むことができなくなったという希望という未来が潰えた瞬間だった

——必死に耐えてきた二人の心は——

——女性としての最後の砦をも完全に破壊した——

――少女たちの抵抗は終わった――
触手の蠢く洞窟内では今も少女たちの声が鳴り響く
その奥に二人はいた
触手に囲まれ全身を白濁に染めらた彼女の胸には今もコアクリスタルに光が灯っている
光は弱弱しく彼女たちもほとんど反応がない…
壊れた人形のようだった…
触手が再び活動を再会し彼女たちの全身を犯し始める
力の失った瞳の奥に僅かに光が灯る
その表情に苦しみはなく快楽に身を委ね喘ぎ声を奏でる壊れた少女はどこか幸せそうだった――
女性としての機能を失い役割を終えた子宮には今も大量の子種が流し込まれている